

「今、私の晴雨計は！^{②⑤}」

「不確実な時代？」

ロナルドとドナルドの時代」

平山征夫

二〇一七年が明け、早いもので二月も終わろうとしている。暦の年が改まって昨日と今日は変わらないのだが、何故か格別な想いがするから不思議だ。前年どんな嫌なことがあっても、今年こそと気持ちを改めることが出来る。そう思うと十二月毎に年が改まるというのは悪くない。年明け早々新年の感想でもと思ったが、今年は世界の政治・経済とも米国のトランプ新大統領次第といわざるを得ず、正式就任

後の様子を見てからにしようと思ったのだが、連日ドラマが展開するのでタイミングが見図られずここまで来てしまった。新大統領を見ての現状の感想はと言えば、「エライ人が選ばれてしまった！」「平気で前言を変えられる困った大統領」といったところ、皆で大統領選と言うトランプゲームをしていたら「ババを引いてしまった」と言うところだ。先日、わが国の安倍首相が訪米しゴルフ外交を展開し、トランプ・安倍の意気投合ぶりをアップルしていたが、TVなどでそれを見ていて何故かドラえものの漫画に出てくるガキ大将のジャイアンとそれにすり寄るスネ夫君が思い浮んでしまった。

トランプ氏の当選以来どういう人物かといった解説本が山のよう出版されたが買う気にはなれず、立ち読みで済ましていたが、一月末にNHK・BS1で「世界のドキュメンタリー」「強欲時代のスーパーヒーロー、ドナルド・トランプ」という番組が放送された。新大統領がどうい人物か知るには極めて有益だった。これは一九八〇年から九〇年までの一〇年間、マンハッタンの不動産王にのし上がってきたトランプ氏（三〇歳台半ばから）を追いかけたドキュメンタリーである。ただ、これは一九九一年に放送しようとして圧力がかりお蔵入りしたいわくつきのもの。今のトランプ大統領とマスコミの

対立の中で今回よく放送されたなど見ながら感心した。派手な振る舞いとビッグマウスでマスコミの寵児となったドナルド・トランプと言う人物の本質は、「自分ファースト、儲けファースト」でそのためには攻撃的で、いい加減な物言いは平気と言うように見えた。強引かつ法律すれすれの不動産商売（例えば四十四階建のトランプタワーを五十階以上あると言って売ったり、ビル解体を全く未経験の別業界の業者を買い叩いてやらせたり・・・）でのし上がってゆく姿は決して褒められたものではなかった。番組の最後の「彼には本当の友人はひとりもない」と言う永年商売上付き合っ

てきた弁護士という言葉が印象的だった。

TPP不参加、メキシコ国境の壁建設とツケのメキシコ回し、NAFTAの見直し、トヨタのメキシコ工場建設への報復措置、貿易不均衡国への高率関税賦課、七か国の移民入国制限などこれまでは考えられないような政策を打ち出し、今のところ本気のような入国制限では大きな混乱だけではなく司法当局と大統領令の有効性を巡って争いまで起きている。就任一〇〇日間は大目に見ようという米大統領就任時の慣習などどこ吹く風のお騒がせ振りだ。ただ、「一つの中国」と「パレスチナの二国共存」という歴代大統領が国の外交方針としてきた

原則について簡単に「見直しもあろう」と発言したのには驚いた。

これは大騒動になると思ったが、その後批判されると簡単に引つ込めた。それにも驚いたが、気が付いた。これは最初に目くらましのはったりをかませておいてから交渉に入るトランプ式不動産商売のやり口なのだ。ゼロから交渉すべきなのにいきなりマイナス〇からスタートと言われると相手はびっくりする。そして交渉結果がマイナス二とか三で終われば良かったと思ってしまう。散々トランプ氏が執ってきたやり口だ。

トランプ大統領の誕生、その発言の意外性から「不確定時代の到来」と盛んにマスコミ等で言われ

ている。想定外のはったりからスタートするから本音や落としどころが見えないからだ。安全保障問題などで振り回されるのは大変だし、通商問題では企業活動が大きく阻害される。

この「トランプ劇場」の幕開けにおいて考えなくてはならないのは、「何故ここまで問題の多い人が選ばれたのか。何故予想外の選挙結果になったのか」である。この点については詳細は別業に譲るとしても、①一九八〇年代からの新自由主義と言われる資本主義の変容に伴う所得格差の拡大、②それに伴う中産階級の崩壊による社会の不安定化、③先進国の人口減や高齢化等による成長力の大幅鈍化、④テロの横行等

社会リスクの増大、⑤AIの進歩によって人々の職業の半分がなくなるなどの漠然たる将来不安、などに加え⑥このまま行けば二〇五〇年頃には米国における白人の人口比率が五〇%を切るということへの危機感などアメリカ特有の要因も挙げられる。これら要因に伴う不満・不安の解消は容易ではないが、人間社会の仕組みとして「自由と公正」の在り方や、「富の分配の妥当性」の追求などの基本問題に政治がきちんと向き合わないと「追い込まれた白人貧困層がポピュリズムに乗る成金大金持ちを支持する」という妙な現象がこれからも起こるだろう。少なくとも世界のトップ60数人の資産が地球上の半分

の人口36億人のそれを上回るというのは適正な富の配分ルールと言えるのだろうか。

もう一つ、これまでのトランプ劇場を見ていて気になったのは、この比較的粗野で単純な人物を裏で操作していると言われる人物たちの存在だ。かなり激しい「白人至上主義」者も大統領補佐官などに就任している。トランプ劇場の芝居の今後の成否は周りを囲むスタッフの出来次第でもあるからだ。本人自体が不確定だから成否は見定めにくいだが、これから真価が問われる経済政策が減税と公共インフラ投資増というポリシーミックスの失敗や、輸入関税引き上げなどの副作用の跳ね返りなどからうまくゆかず、

熱狂的だった貧困層の支持が次第に失望に変わってゆく、素人の多い閣僚やスタッフと大統領の不調和、スタッフ同士の不和などから政策遂行能力が急落する、などが見込まれる。上手くゆくシナリオは想定しにくいが、大統領の政策への関心が急速に薄れ、選んだスタッフに任せられた結果、意外とうまく遂行されタカ派政策が徐々に「強いアメリカ」を実現してゆくシナリオはあるだろうか。劇場の観客としては火の粉をかぶらないようにしながら見守るしかない。

ここまで書いてきて、ふと「レーガン大統領に似ている」と思った。二人の共通点を挙げると、ロナルドとドナルドはともかく大

統領に就任した年齢が六十九歳と七十歳の高齡、初めての離婚経験者の大統領レーガンと既に二回の離婚歴のトランプ、政策の柱が「強いアメリカの復活」、そのための軍備の増強、経済政策の目玉は「減税」、日米関係は蜜月（安倍・トランプはロン・ヤス関係以来？）など挙げられる。レーガンはソ連崩壊、東欧民主化など冷戦終結やレーガノミクスによる一定の経済政策成果など評価される一方、双子の赤字を残した批判も多い。でも、実績の割に人気が高いのは巧みなジョークに現れる陽気な人柄のせいだ。トランプにはどうもその才能はないようだ。トランプのジョーカーになる可能性はあるが……。就任間も

なくレーガンは暴漢に襲われたが、それだけは似て欲しくない。更には、歴代大統領の評価を見ると、二十九代のウォレン・ハーディングとリンカーンの前の第十五代ジェームス・ブキャナンが最下位を争っている（二人には低評価の理由がそれなりにあるが……）。トランプ氏にはこの二人を下回ることのないことを世界平和のためにも秘かに願っている。

（平成二十九年二月二十七日）